

金久保内出遺跡 (第2次) 上里町

「立地と環境」

金久保内出遺跡は、JR高崎線神保原駅から北西へ3kmの児玉郡上里町大字金久保989に所在する。遺跡は、神流川扇状地末端の低台地上に立地し、標高は約59.8mである。遺跡の北側は、神流川と烏川が流れる低地にむかい傾斜している。また神流川と烏川が遺跡の北西で東流し、この烏川が北東に進むと利根川と合

流する。遺跡はこれら複数の河川の結節点に位置する。

遺跡の周辺には、神流川扇状地に原遺跡、前原遺跡などの古墳時代の集落跡が分布する。また、神流川と烏川合流地点付近に毘沙吐古墳群が立地している。

奈良・平安時代の遺跡は、神流川扇状地の扇端部に寺西遺跡、清水南遺跡、長塚遺跡、本庄台地の先端部に北稲塚遺跡などが分布する。

中世の遺跡は、天正10年

(1582)の神流川合戦にかかわるとされる金窪城跡がある。また、遺跡の南東約300mには、金窪神社が鎮座する。大永5年(1525)に、金窪城主の斎藤盛光が創建したとされる。

遺跡は、昭和56年に県営ほ場整備事業上里北部地区工事に伴い、上里町教育委員会が第1次調査を行った。この調査では、古墳時代後半から奈良時代にかけての竪穴住居跡を3軒検出した。このため、遺跡は古墳時代から奈良時代の小規模な集落跡と考えられていた。

「発見された遺構」

金久保内出遺跡第2次調査では、縄文時代前期と古墳時代から中・近世の遺構を検出した。調査区は、便宜的に道路を挟んで3つの地点に分

け、方位をもって東側調査区、北側調査区、西側調査区と呼称した。

東側調査区と北側調査区では、縄文時代前期と奈良・平安時代の集落跡

を、西側調査区では、古墳時代の集落跡と中世の土壌墓群や溝跡等を検出した。

東側調査区

東側調査区では奈良・平安時代の竪穴住居跡を検出した。また、調査区内の奈良・平安時代の遺構の覆土から縄文時代前期の遺物が出土したことから、第二面(縄文時代)の調査を実施した。各時代の概要は以下の通りである。

縄文時代

縄文時代の遺物は、調査区全体から発見された。

遺物集中は1箇所検出された。遺物集中は、調査区南東の径5mから6mの範囲で、縄文時代前期後半の諸磯式土器や石器等が多量に出土した。また調査区全域からは、縄文時代前期後半の諸磯式を中心とした土器片や、石鏃、打製石斧、石匙、黒曜石の剥片等の石器が点在して出土した。



東側・北側調査区 全景

- 所在地
児玉郡上里町大字金久保989
- 実施期間(事業者)
令和4年4月~令和5年3月
(国土交通省関東地方整備局)
- 調査面積
5,663㎡
- 遺跡の種別
集落跡
- 主な遺構
第1地点(東側調査区)
縄文(遺物集中1)、奈良・平安(住居跡38・掘立柱建物跡2・土壌135・溝跡18・ピット229)、中・近世(土壌1・ピット1)
- 第2地点(北側調査区)
奈良・平安(住居跡1・土壌4・ピット4)、中・近世(土壌1)
- 第3地点(西側調査区)
中・近世(掘立柱建物跡2・土壌墓9・土壌128・溝跡4・ピット276)

I 令和四年度に調査をした遺跡



縄文時代遺物集中

奈良・平安時代

遺構は、竪穴住居跡38軒、掘立柱建物跡2棟、土壇135基、溝跡18条、ピット229基が検出された。

竪穴住居跡は、調査区全域から検出され、遺構の密度は西寄りが高く、東寄りはやや薄くなる。また奈良時代の遺構は南西に多く、平安時代の遺構は北東に分布する傾向が認められた。集落が、東に移動していた可能性が考えられる。残存状態の良い竪穴住居跡が多く、掘り込みが約60cm残存しているものが10軒検出した。そのためカマドの残存状態も良く、煙道部の天井が残存している竪穴住居跡も検出された。また、焚き口から煙出しまで1.5mを越える煙道も確認できた。



東側調査区 第13号住居跡

また、奈良時代前半の第16号住居跡は、調査区南壁に接しており南北の長さは不明ながら、東西幅約6m、カマド全長約2mの大型の竪穴住居跡である。カマドは北壁に構築され、周辺にはカマドの構築材と考えられる土師器の甕が少なくとも3個体出土しており、強固に構築されていたことが確認できた。カマドの東側から検出された貯蔵穴は、礫層を掘り込んで作られており、底面付近から完形の土師器杯が数点出土した。

平安時代前半の第13号住居跡は、東西約4m、南北約3.5mで東壁にカマドを設けている。竪穴住居跡の規模としては一般的であるが、カマドの全長が約1.8mと長く、煙道の天井部が一部残存していた。カマドの焚き口中央部か



東側調査区 第16号住居跡 遺物出土状況

ら土師器の甕が、潰れた状態で出土した。調査区の北西部からは、掘立柱建物跡が2棟検出された。

中・近世

遺構は土壇1基、溝跡1条、ピット1基が検出された。

第1号溝跡は、約20m東西方向に延びる溝跡で、調査区の西端から検出された。覆土の中層からは、鎌倉時代頃の瓦質土器の鉢が出土した。この第1号溝跡の東端部に、拳大の礫を径1m程の範囲に敷き詰めた第273号土壇を検出した。礫を取り除いたところ、下から人骨が屈葬状態で検出した。遺物を伴わないため詳細な時期は不明だが、西側調査区の事例から中・近世と考えられる。



東側調査区 第273号土壇

北側調査区

北側調査区は、調査区中央から西に向かって傾斜している。奈良・平安時代から中世および近世の遺構を検出した。

奈良・平安時代

遺構は竪穴住居跡1軒、土壇4基、ピット4基が検出された。

中・近世

遺構は、土壇1基が検出された。第104号土壇は、調査区中央から検出された。覆土下層から青磁の破片が出土した。施文方法から中世前半の遺物と考えられる。

西側調査区

西側調査区は、調査区中央から北方向に傾斜しており、古墳から平安時代、中・近世の遺構が確認された。今年度は中世以降の遺構・遺物が

を調査した。

中・近世

掘立柱建物跡2棟、土墳墓9基、土壇128基、溝跡4条、ピット276基が検出された。調査区全域にわたって土壇とピットが広がり、調査区中央に掘立柱建物跡が2棟、調査区西側に掘跡と土壇墓群が広がっている。

調査区の中央から、第3号、第4号掘立柱建物跡が検出された。規模はともに桁行4間、梁間2間で、内部にも柱穴をもつ総柱建物である。土壇墓は、第9号溝跡の西側から一部溝と重

複して9基が検出された。土壇墓内には、人骨が残存していた。土壇墓の主軸は南北方向でほぼ一致し、埋葬の頭位方向も北のものが多く、頭蓋骨や腕骨、大腿骨などの他、一部の土壇墓では骨盤や鎖骨、肋骨などを検出した。遺物は副葬された六道銭の他、かわらけや灰釉丸皿が数点出土した。

六道銭に永楽通宝がみられたことや、灰釉丸皿の時期から、土壇墓群は戦国時代から江戸時代初頭にかけての墓域と考えられる。第9号溝跡は、調査区中央から西側にL字状に延びている。上幅約1:6



西側調査区 全景

m、長さ約31:2m、深さ1:2mの規模の薬研堀である。遺物は混入した古墳・奈良時代の土器片の他、中世の遺物は1点のみが出土した。溝跡の覆土上層から、土壇墓群が検出された。

「まとめ」

金久保内出遺跡は、神流川扇状地末端の微高地に立地した遺跡である。第2次調査の結果、縄文時代、古墳時代から平安時代、そして中・近世の遺構を検出した。

第1次調査では、縄文時代前・中期の遺物と古墳時代後半から奈良時代の遺構を検出したが、今回の調査によって平安時代以降も集落が営まれており、また中・近世の遺構も存在することも明らかと



西側調査区 第3号・第4号掘立柱建物跡

なった。

縄文時代の遺物は、縄文時代前期の石器や土器が出土した。神流川の扇状地扇端部から自然堤防上にかけては、縄文時代前期から中期の土器が出土することが知られており、金久保内出遺跡第1次調査でも、縄文時代前期から中期の土器方が出土している。

奈良・平安時代については、神流川扇状地の扇端部に、寺西遺跡や清水南遺跡などと同様に集落跡が連続と営まれていたと考えられる。また、奈良時代の竪穴住居跡からは、円面硯や陶白など希少な遺物が出土した。円面硯は寺西遺跡・田中西遺跡の2遺跡からも出土している。一般的な集落遺跡にはみられない遺物が出土していることから、通常の集落跡とは性格が異なる集落である可能性も考えられる。



西側調査区 第50号土壇墓

中・近世の遺物では、渥美焼・常滑焼といった陶器が出土した。陶器の年代は遺跡の北に位置する、金窪城の始源伝承の時代と重なる。また中世の土壇墓群は、戦国時代末期から江戸時代初頭にかけての墓域であることがわかった。戦国時代末期、遺跡の周辺地域において神流川の合戦が行われたことから、その関連性を考慮しておきたい。

中・近世については、豊富な文献史料からその様子を知らることができるが、考古資料が少なく、実態については不明な点も多い。今回出土された陶器および土壇墓群は、当時の歴史を復元するうえで、貴重な考古資料となった。

今回の調査により、上里町の歴史の一端を解明する貴重な成果を得ることができた。

たかさかやかたあと
高坂館跡 (第11次) 東松山市

「立地と環境」

高坂館跡は、東武東上線高坂駅から北東に約600mの東松山市高坂に所在する。遺跡は、高坂台地の北東部に立地する。台地の北部と東部は、都幾川の沖積地に面し、比高約10mの急な崖である。館跡の規模は、東西約165m、南北約225mである。館跡は現在、曹洞宗寺院の高済寺となっており、寺の境内周辺には、館跡の堀や土塁が残っている。

館跡は、古墳時代の遺跡である高坂二番町遺跡と隣接し、高坂古墳群の範囲内に位置している。高坂古墳群は、8号墳と9号墳の間から、



調査区全景 (北から)

県内初の三角縁神獸鏡が、ほぼ完全な形で出土していることで知られている。

周辺の中世の遺跡は、旧正法寺跡、足利基氏墨跡、小代氏館跡などがある。都幾川の対岸には青鳥城跡、野本氏館跡などが知られている。

高坂館跡は、中世の武蔵武士である高坂氏が居住したと言われている。館は、南北朝期(14世紀)以降に成立したと考えられている。高坂氏の名は、鎌倉時代末期の元弘元年(1331)、鎌倉幕府の後醍醐天皇討伐軍の中にみられる『光明寺残篇』。その後、応安元年(1368)、高坂氏は河越氏とともに、平一揆の中心となって鎌倉府に対して反旗を翻したが、敗北して、没落したとされている(『鎌倉大日記』『花栄三代記』)。『新編武蔵風土記稿』には、戦国期に後北条氏の家臣である高坂刑部が、この館に居住していたと記されている。

戦国期の高坂の地名が残る記録として、『鎌倉大日記』に明応3年(1494)、明応の政変にあたり北条早雲が、扇谷上杉氏に加勢した軍事行動で「高坂(に)在陣」と記されている。また、永禄4年(1561)に後北条氏が、松山城攻めを行ったときは、北条氏康が小代や高坂に陣を取った(栄俊法印の覚書)。さらに、北条氏政も「高坂へ寄陣」と「北条氏政書状写」(『士林証文』)と記されている。

「発見された遺構」

高坂館跡第11次調査の調査区は、南西の高坂台地から北東の都幾川へ下る、高済寺東側の傾

斜地となっており、館を構成する平場が想定されたが、検出されなかった。

「まとめ」

今回の発掘調査は、高済寺東側の斜面地を対象に実施した。当初予想された平場は確認されず、中世城館を構成する傾斜地が検出された。中世の遺物は板碑片が検出されたが、高坂館に関連するかは不明であった。

ほかに遺物は、古墳時代の、土師器・須恵器・埴輪の破片が出土したが、高坂古墳群の範囲内のため、調査区域内の表土に混入したと考えられる。

その他、江戸時代後期以降の瓦や陶磁器が出土した。瓦は、高済寺の屋根の葺き替えて廃棄されたものと考えられる。陶磁器は、茶碗など日常的なものが検出された。



遺跡全景

- 所在地
東松山市高坂駅東口第一土地区画整理事業13街区20画地(高坂館跡)
- 実施期間(事業者)
令和4年9月～令和4年10月(国土交通省関東地方整備局)
- 調査面積
301㎡
- 遺跡の種類
城館跡
- 主な遺構
古墳、平安、近世(斜面(館跡に伴う旧地形)1)

みたけ 三竹遺跡（第3次）川島町

「立地と環境」

三竹遺跡は、旧入間川と荒川の合流点に近い、川島町南端の出丸中郷地先に所在する。

川島町は埼玉県のほぼ中央に位置しており、西に越辺川や都幾川、東に荒川、北に市野川、南に入間川などが町を囲むように流れている。町内には複雑に蛇行した旧河川が存在し、周囲に自然堤防などの微高地や後背湿地が広がっている。

川島町では、旧石器時代の遺構・遺物は発見



調査区全景

されておらず、人々がこの地を利用し始めたのは縄文時代以降と考えられる。荒川右岸の河川敷から発見された東野遺跡は、地表下約4.5mから検出され、前期の竪穴住居跡8軒や土壇などが発見されている。

古墳時代前期になると、低地の開発が著しく活発となり、荒川中流域の自然堤防上では大規模集落が出現した。しかし、三竹遺跡では当該期の遺構や遺物は発見されていない。また、同じく自然堤防

上には前方後円墳や円墳などの古墳が築かれている。三竹遺跡に隣接する白山太神社には、前方後円墳と推定される白山古墳がある。そのほか、廣徳寺古墳、養老院内古墳、愛宕塚古墳、富士浅間塚古墳などが築かれている。これら古墳の築造年代には不明な点が多いが、低地の開発と深い関連があったと考えられる。

江戸時代になると、江戸幕府によって荒川の西遷事業が行われ、流路が大きく変わった。入間川や荒川には渡し場や河岸が営まれた。三竹遺跡の近くにも、金兵衛河岸あるいは金兵衛の渡船場があり、現在の上尾市や桶川市方面と川越市方面を結び、人々や物が行き来していたよう

である。また、川島町には洪水対策で設けられた水塚が多く分布しており、人々が河川の影響と隣り合わせて生活していたことがうかがわれる。

「発見された遺構」

三竹遺跡第3次調査では、古墳時代中期から後期初頭の古墳群と近世の集落跡を中心とした



第6号墳

遺構が検出された。今回の調査で検出された遺構は、古墳時代の溝跡6条、古墳8基、中世の土壇1基、溝跡1条、火葬跡3基、近世の土壇75基、井戸跡8基、溝跡38条、性格不明遺構2基である。そのほか、時期不明の竪穴状遺構2基、柵跡1列、炉跡1基、ピット173基が検出された。

なお、古墳の遺構番号については、第1次調査から継続して番号をつけた。

- 所在地
川島町出丸中郷地先
- 実施期間(事業者)
令和4年10月～令和5年3月
(国土交通省関東地方整備局)
- 調査面積
4,700㎡
- 遺跡の種類
集落跡・古墳群
- 主な遺構
縄文、古墳、中・近世(竪穴状遺構2・土壇76・井戸跡8・溝跡45・古墳8・柵跡1・火葬跡3・炉跡1・ピット173・性格不明遺構2)



第6号墳遺物(円筒埴輪)出土状況



第2号火葬跡

とから、埋め戻された可能性はある。外側の周溝から遺物は、5世紀の須恵器の甕、甕のほか、円筒埴輪が多数出土した。

第7号墳の周溝は、径8m、幅1.2m、深さ0.26m、断面は半円形であった。推定される墳径は7mである。

第8号墳の周溝は径13m、幅1.8×2.2m、深さ0.4mで、断面は半円形であった。推定される墳径は12mである。周溝の底面付近は地山のシルトブロックを多く含んでおり、非常に固くしまっていた。

第9号墳の周溝は径17mで、幅2.0×2.8m、深さ0.7mで、断面は半円形であった。推定される墳径は12m以上である。遺物は、5世紀の須恵器の甕、甕、土師器の坏、白玉が出土した。

第10号墳の周溝は径10mで、幅1.2m、深さ0.34m、断面は逆台形であった。推定される墳径は8mである。遺物は、鉄製の鋤先と土師器の甕が出土した。

第11号墳の周溝は幅1.8m、深さ0.56m、断面は逆台形であった。周溝の底面付近は地山のシルトブロックを多く含んでおり、非常に固くしまっていた。大部分が調査区外にあるため規模は不明である。遺物は、6世紀の土師器の坏が出土した。

第12、13号墳は、周溝の一部が検出された。大部分が調査区外にあるため規模は不明である。第12号墳の周溝は幅0.6m、深さ0.14mで、断面は逆台形であった。第13号墳の周溝は幅3.2m、深さ0.88mで、断面は逆台形であった。

このほか古墳の北側及び西側から円筒埴輪や土師器坏の破片が出土した。

中世

火葬跡が3基検出され、焼土と骨片が出土した。第1、2号火葬跡は平面形がT字形で、断面は逆台形であった。

第6号溝跡は約21m、深さ2.5m、断面は半円形であった。「正中二年」(1325)銘の入った板碑が出土した。

第69号土壇からは、中世以降の馬具(轡)と馬の歯の骨が出土した。

近世

近世の遺物は、18世紀から19世紀にかけての陶磁器や土器が出土した。一部の遺構の覆土には、天明3年(1783)に降下した浅間A軽石が混入していた。第5号溝跡は、横塚樋管に沿った旧流路に直交して延びていた。

調査区北側の第43号溝跡は、長さ54m以上、深さ1.72mで、断面は逆台形であった。調査区の東側には盛土があり、第43号溝跡はこれを取り巻くような位置関係にあった。

「まとめ」

三竹遺跡の発掘調査では、二重周溝の円墳である第6号墳と、それを取り巻くように、径10m前後の円墳で構成された5世紀から6世紀前半の初期群集墳が発見された。

二重周溝をもつ円墳は、前回の調査では第1号墳が検出されている。内側の周溝が埋め戻されており、そこからの出土遺物がほとんどないことなど、第1号墳と第6号墳の構築技法には共通点がある。ただし、出土した土器と埴輪の製作技法を比較すると、第1号墳が第6号墳よりも新しいと考えられる。

また三竹遺跡で検出された古墳は、墳丘の規模、埴輪や土器の有無などから、いくつかのグ



第6号溝跡 板碑出土状況

ループに分けられるようである。

中世には火葬跡、板碑が出土しており、墓域だったと推測される。第69号土壇から出土した馬骨と馬具からは、馬が轡をつけた状態で土壇に埋められたと推測できる。馬の墓、あるいは何らかの儀式を行った痕跡であると考えられる。

近世には、集落跡が営まれていた。主な時期は18世紀頃から19世紀頃と考えられる。川島町は荒川、入間川、都幾川、越辺川に囲まれており、江戸時代には10箇所ほど渡船場があったようである。遺跡が所在する当時の出丸中郷村には、渡船場が金兵衛河岸あるいは金兵衛の渡しがある。この渡船場は、今回の調査区から近いところであり、検出された集落跡と渡船場の関連が推定される。

そのほか、第43号溝跡は大型の溝跡で、水塚に伴う構え濠とみられる。荒川や入間川の水害に備えながらも、河川のもたらす恵みや水運を利用しながら生活していたことがわかった。